

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 浦生石罌と長崎鼻古墳を訪ねる

講師 小川 賢

(高松市教育委員会教育部文化財課)

平成22年4月25日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

長崎鼻古墳

【古墳の立地について】

屋島先端、瀬戸内海に突き出た長崎ノ鼻は、瀬戸内海への眺望に優れ、長崎鼻古墳はそのすぐ裏側にあたる標高50mの尾根上にあります。そこは、屋島北嶺より北に派生した尾根が東へ方向を変える部分にあたり、前方部を山側に、後円部を海側へ向けて古墳は造られています。古墳は尾根を最大限利用して造られているため、古墳の長さや前方部の幅などに比べて後円部の幅がやや狭く窮屈な印象があります。一般に前方後円墳に葬られる人物は、その地域を治めた有力な豪族である場合が多く、自分が治めていた地域が見渡せる小高い山の上に造られるのが普通ですが、この古墳から見渡せる場所は、緑豊かな平野ではなく、備讃瀬戸の海と島々が見渡せる眺望の優れた場所にあります。古墳が造られた場所が他の古墳と異なっており、この古墳に葬られた人物の活躍した（治めていた）場所が眼前に広がる海であったことは明確です。香川県内では、同様に海が見渡せる場所に造られた古墳が津田湾沿岸をはじめ海岸近くの各所に認められることから、長崎鼻古墳に葬られている人物と同様な役割をもった人物が葬られている可能性が高いと考えられます。



南側くびれ部葺石状況

【古墳の大きさ】

長崎鼻古墳の大きさは、全長約45m、後円部の直径27m、前方部の長さ22m、後円部の高さ5・2mです。この時期の古墳としては、県内で最大級の規模です。調査前から墳丘の斜面部分には葺石と呼ばれる土留の石が露出していましたが、発掘調査の結果、想定どおり墳丘斜面部を3段に分け葺石で覆われていることがわかりました。各段の裾には、他の葺石よりも大きな石材を使用して裾を明確にしています。葺石の積み方から幅約1・4段の間隔をおいて縦方向へ目地の通る基準の葺石列も認められました。この区画された範囲が葺石を積むための一つの作業する単位であった可能性が考

えられます。

【主体部の構造】

古墳の主体部（人が葬られている場所）は竪穴式石室で後円部の中央に一つ認められ、長軸約8 m、短軸7 mの範囲に造られています。床面は石室よりも広い範囲に深さ40 cmの礫を敷いています。礫を厚く敷くのは、墳丘の盛土内にしみこんできた雨水によって棺が納められている石室内に水が溜まらないように排水対策を兼ねているものと考えられます。厚く敷かれた礫の床面中央部に石棺を安置し、石棺を囲むように石室の石を積み上げます。石棺が隠れる程度の高さまで積上げると礫を敷いた床と同じ範囲を裾から安山岩の板石で覆っていき、最後に残



竪穴式石室内石棺出土状況

った石室の上部の空間を直方体の安山岩を架けて蓋をします。蓋石の上部は、防水対策と考えられる厚さ約10cmの灰色の粘土で覆われていました。

【出土遺物】

墳丘のくびれ部から土師器壺の破片が出土したほか、竪穴式石室からは朱塗りの

あそようけつぎょうかいがん

ふながた

阿蘇熔結凝灰岩製の舟形石棺の破片が出土しました。石棺の表面には、加工の時につ

ちような

いたと考えられる手鉋の痕跡が明瞭に残っていました。この時代、讃岐には二つの石

棺製作地がありました。一つは高松市国分寺町の鷲の山、もう一つはさぬき市津田町の

火山です。これらの製作地で造られた石棺は香川県内はもとより、対岸の吉備（岡山県

ほか）や大王の墓が多く造られていた近畿の地へも運ばれていたことがわかっています。

このような状況から、調査前は二つの内のいずれかの産地で造られた石棺が納まっていると考えていましたが、前述のとおり予想は大きく外れました。阿蘇熔結凝灰岩製の舟形石棺は、県内ではこれまで観音寺市内の二箇所の古墳でしか確認されていませんでしたが、今回の確認により石棺の分布範囲を塗り替えるとともに、棺の形から県内では最も古くに運び込まれていることがわかりました。

竪穴式石室の内部の状況は『木田郡誌』に詳述されており、それによれば「後円部を67尺（約2m程度）掘り下げたところ割り抜き式の石棺があり、破壊して中を見ると、

中に頭を東北にして寝かした人骨があった。棺の中には、刀劍二振、鏢一個、直径25cmほどに錆固まった鉄鏃てつぞくがあり、石棺には石枕だけではなく、足の部分にまで形を彫りつけている。」との記述が残っています。

【被葬者について】

長崎鼻古墳が造られた時代は、近畿（当時の中央）の勢力が力を蓄え、地方の勢力を従えていくという大きな時代の変わり目にあたります。瀬戸内海が見渡せる山の上に築造された長崎鼻古墳に葬られた人物は、そのような時代に活躍した人物であり、遺体が納められた棺は讃岐からは遠く離れた九州から運ばれたものを使用していることから、この人物が瀬戸内海の海上交通に携わり、広い範囲につながりを持って活躍していたことが考えられます。長崎鼻古墳の周辺には他の古墳は造られておらず、この古墳に葬られた人物がどこからやって来て、その後、子孫たちは、どこへ行ってしまったのか全くわかりません。

くじら
はか
鯨の墓



長崎鼻古墳と同じ尾根上になる西側には、古墳の後円部よりも高い高まりがあります。この頂部に、鯨の墓と呼ばれている祠があり、祠の中にはT字形をした骨のようなものが祀られています。「明治中期、二の浦に鯨の

死体が揚ったので地元の人が、竹矢来組み、見世物にした由、その後、骨を加工しT字型にして、それを御神体として祀っている。」とも云われています。

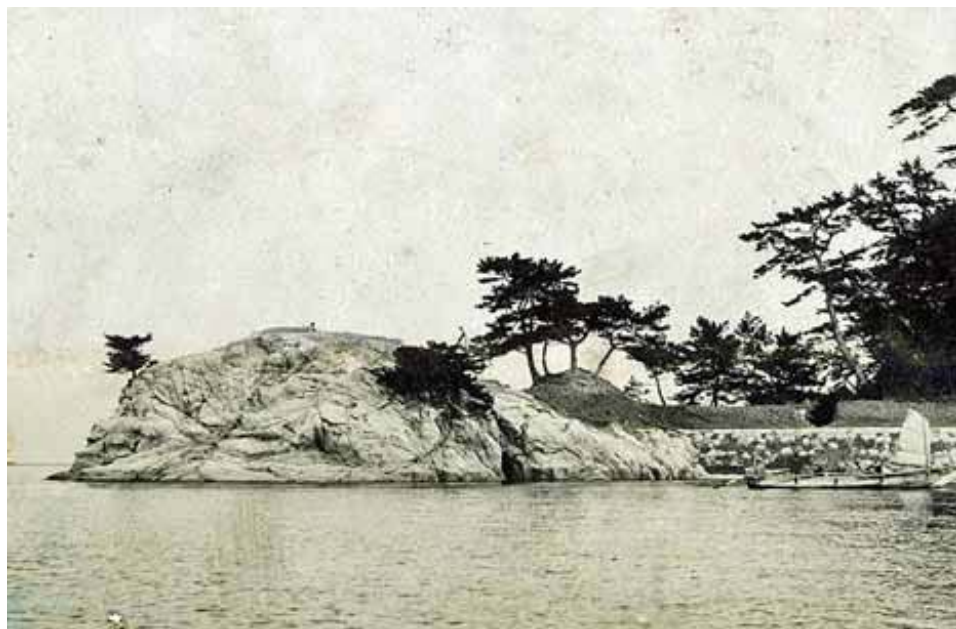
長崎鼻古墳を発掘調査した時に、この鯨の墓がある高まりが古墳である可能性があったため、この高まりについて試掘り調査を行いました。この調査では、古墳と考えられるものは何も見つかりませんでした。

試し掘り調査の状況

ながさきのはなほうだいあと

長崎鼻砲台跡

1863（文久3）年に、日本へ来航する外国船を打ち払うため、高松藩の藩命を受けた藤川三溪が造った砲台です。高松市街から女木島、男木島、大島、豊島、小豆島などを一望できる海に向かつての眺望が特に優れた場所にありますが、砲台跡は西を向き築かれていて、上・中・下段の三段からなり、中段と下段に各三門の大砲が据えられていました。明治維新の後、大砲は撤去されましたが、現在も、波等で崩落が進むなかで、下段に残る強固な石積や大砲の基台跡、上段にある方形の土塁跡が往時の様子を伝えています。



昭和初期の砲台跡（個人所蔵）

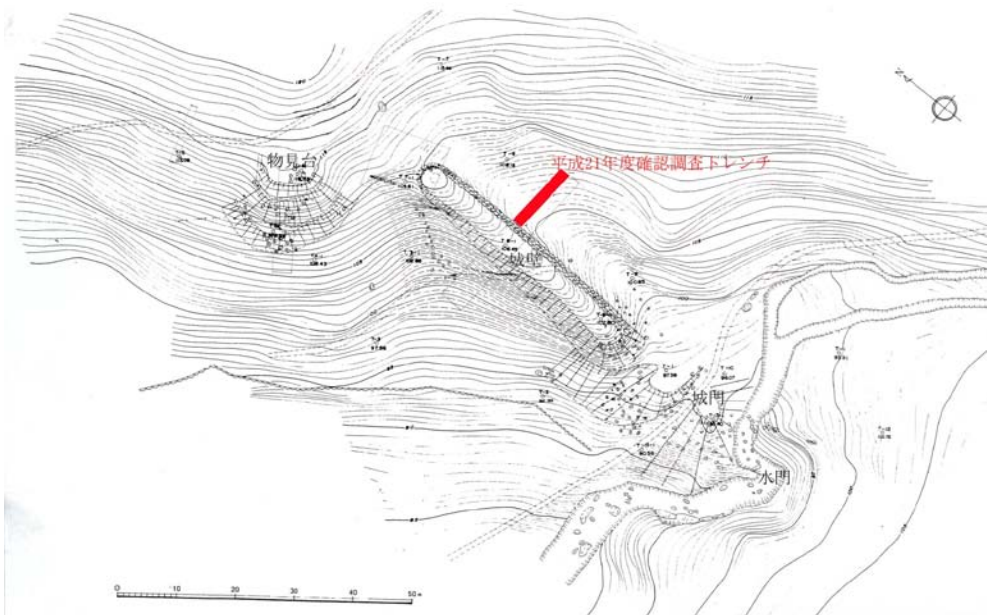
やしまのきあとろうろせきるい
屋嶋城跡浦生石塁

【浦生の石塁と屋嶋城】

瀬戸内海に面した浦生地区の奥に、屋島の北嶺と南嶺に挟まれた大きな谷があります。この谷は大きな谷と呼ばれていますが、鑑真ヶ谷、弘法谷ともいい、屋島寺を創建した鑑真か、あるいは同寺を中興した空海がこの谷を山上に向かつて上がったとされ、海岸の浦生と山上を結ぶ道であったと伝えられています。谷に沿ったこの道は、現在も登山道として残っています。緩斜面がやがて急斜面になる



空中写真－屋島山上の城壁遺構と浦生の石塁遺構の位置－



浦生の石塁測量図—遺構配置と平成21年度調査地点—

ところに、浦生の石塁があります。昔、この周辺は「櫓の内」「櫓ヶ岳」という城跡を示すような地名があったようです。

屋嶋城については、『日本書紀』に天智天皇6年（667年）に築城されたという記事があります。近年、山上部で城門、水門、土塁といった城壁遺構が見つかっており、屋嶋城が実在のものであることが分かってきました。それまでは、この浦生石塁が屋嶋城を示す唯一の大規模な遺構とされてきました。

【これまでの経緯】

浦生石塁について、具体的な調査が始まったのは大正時代からで、大正1

1年には香川県史蹟名勝天然記念物調査報告において、『日本書紀』に記載された屋嶋城とは北嶺・南嶺を取り囲む広大なものであるが、なかでも浦生地区に残る石塁が城跡の遺構とされました。また、この報告では石塁が城門、水門、城壁、櫓の特徴を備えたものとして列挙されています。この後、昭和9年、屋嶋が国の史蹟天然記念物に指定される際には、「天智天皇6年外寇防備の為に築かれた山城の一なり」として史跡の一つとして評価もされています。

これまでの発掘調査は、昭和55年度に高松市教育委員会が実施したものが唯一でした。その際に測量した成果によると、石塁は長さが約110mにもおよび、幅が6〜9mの規模をもつものです。また発掘では出土品がありましたが、何れも中世の時代のものであったことから調査では古代であるとの確証が得られず、『日本書紀』に記された古代の山城と断定しにくい状況になっていました。

【平成21年度の発掘調査について】

このように浦生石塁が、屋嶋城に関した大規模な遺構とされながら昭和55年度に実施された確認調査以降には、資料の蓄積がなく、十分な評価が行えない状況でした。

こうした状況から高松市教育委員会では、出土品による年代の特定とともに、城の構造についての資料蓄積を目的とした調査を実施することにしました。



平成 2 1 年度発掘調査状況－東方向から－

調査の初年度である平成 2 1 年度については、物見台、城壁、城門、水門で構成される石塁の現況を把握しやすくするため、下草刈りおよび落ち葉掻きなどの清掃作業を行っていました。

さらに、発掘調査については、石塁の内側に設けた既往（昭和 5 5 年度）の発掘範囲と重複させて、5 5 年度の調査で出土した中世土器の包蔵状況、土の堆積について再確認を行うとともに、石塁の断面構造を把握することを目的に実施しました。発掘の範囲は、既往の調査範囲より一回り広い、長さ 1 5 m、幅 2 m 前後で、山の基盤層までを目指して人

力によって掘削した結果、深度は最深部で1.7mになりました。

【調査成果について】

発掘を進めていくと、石罫の奥の山側から転落してきたと考えられる石に混じって、土器の破片がいくつか見つかり、つなぎ合わせると須恵器の平瓶^{へいびん}であることがわかりました。この土器は、日本書紀に記された屋嶋城が築かれた時代と同じ頃になる7世紀後半頃の特徴をもつものでした。この築城時期と合致した土器の出土によって、かねてから推定されてきたように、浦生の石罫が屋嶋城の遺構である可能性が高くなりました。



平成21年度発掘調査出土須恵器平瓶

また土層状況から、現在、地表面に現れている石塁は盛土によって基礎が築かれている可能性が高いことも分かりました。

【今後の展望について】

今回の調査で須恵器が出土した深さから考えると、石塁が造られた当時の地面は今よりも低く、現在は埋まっている部分も多いことが分かってきました。今地表に見える石塁から物見台、城壁、城門、水門の遺構が推定されていますが、さらに別の遺構や当時使われていたものが埋まっている可能性があり、今年度以降も調査を継続して行う予定にしています。

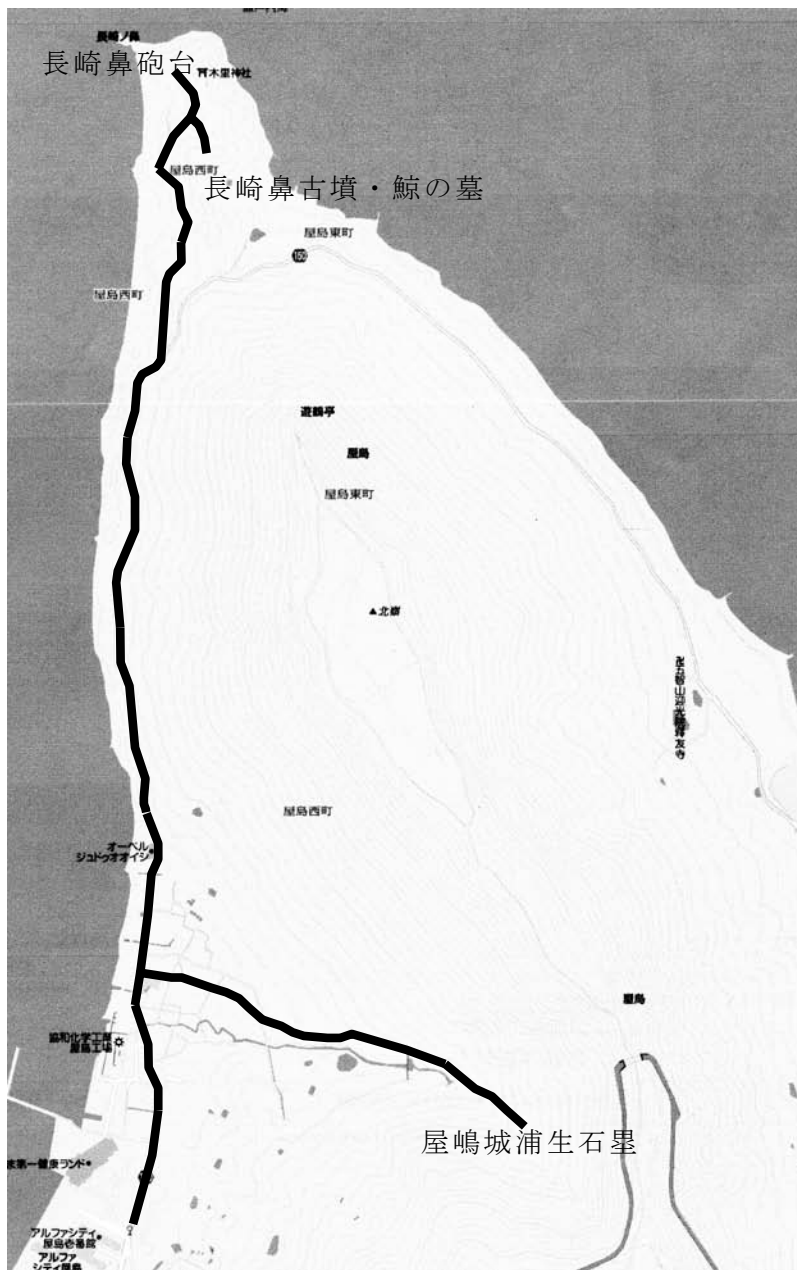
今後の調査により、浦生石塁の内容をより一層明らかにし、屋嶋城の防御機能の全容解明につなげたいと考えております。

参考・引用文献

『文化屋島 第43・49号』屋島文化協会

『史跡天然記念物屋島・史跡天然記念物屋島基礎調査事業』高松市教育委員会

『屋島城跡』高松市教育委員会



浦生と長崎鼻探訪のルートマップ